

そもそも心理支援は、 精神科治療とどう違うのか

対話が拓く心理職の豊かな専門性

下山晴彦編著

遠見書房、四六判220頁、2,420円、2024年5月刊

(東京国際大学) 妙木浩之

本書は「臨床心理」iNEXTというオンラインの雑誌からの抜粋で、最初は精神科医の黒木俊秀氏から脳科学者の茂木健一郎氏、心理の東畑開人氏と著名な論者からはじまり、最後は信田さよ子氏といった、優れた論客の間に、台頭しつつある若手(中堅?)のさまざまな臨床心理の人たちが、下山氏との対談を行っている。オンラインには、こうした対談のアーカイブがあって、本書をきっかけとして無料のものから、有料のものに導入する形なので、本書はまずは導入編ということになる。面白そうだと思った読者が、その中に入っていけば、そのサイトにはコミュニティのような対話の場も用意されている。こうした試みが、いろいろなところで行われていき、時には政府や現場に影響力をもつことが、こうしたネットワークのエフェクトなのだろう。ちなみにこの会員制のオンラインのサイトを2019年に開設したのは下山晴彦氏なので、本の構成も基本的には、彼の主張を中心に展開している。日本で臨床心理の未来を考える立場にある彼の主張を大きく分けるなら、二点に集約される。かつての臨床心理学は「プライベート・プラクティス」モデルだったが、公認心理師制度ができた今、このモデルは「パブリック・サービス」モデルへと変化していく。世界の臨床心理は、エビデンスベーストになっていて、より公的に認められるようになるには、これまでの学派主義を乗り越えて、医学モデルを超えて心理支援の新しい、利用者のためのケース・フォーミュレーションを基盤とした自らのモデルを作っていく必要がある。大きくこの二点は、臨床心理学というオリジナルの学問を、単に精神医学の医師の指示の下に置くのではなく、発展させたいという思いがあるからだろう。

本書は導入なので、それを読んで、面白そうだと思った人たちが、そのサイトに行ってみて、という

ことが基本。著者たちの本も紹介されている。だからこういったサイト、オンライン文化のイントロ部分から、アーカイブを使ってほしいというのが著者の意図。ただ導入の、この本を読むだけでも面白いのは、対談のなかで、いろいろな意見と出会っていきるところ。茂木氏は、エヴィデンスとはいっても、そればかりじゃと異論を述べ、黒木氏は、精神医学が一番貧しい医学領域だから、そんな貧困層の下にいても何の得もないから、医学なら他のもっと儲かっている領域との近接を考えたほうがいいという。なかなかの慧眼。東畑氏は大学での学びは本当の現場とそもそも言葉の使い方が違うから、現場の普通の相談から立ち上げる言葉を考えようという。石原孝二氏の「精神科医療に対する代替モデル」はそれ自体興味深いけど、この本だけでは内容はなかなかわからない。だから論客たちの主張が面白いと思った読者が、そのアーカイブだけではなく著作を購入することが理想だろう。

その間に、山崎孝明氏、糸井岳史氏と岡野憲一郎氏との対談など、いろいろな専門領域を横断的に紹介している。宍倉久里江氏と野中舞子氏のエクスポージャー論、小倉加奈子氏の遊戯療法と認知行動療法の掛け合わせ、田中ひな子氏のブリーフセラピー論、平野真理氏のレジリエンス論、池田暁史氏と北原祐理氏のメンタライゼーション論、有光興記氏と中野美奈氏のコンパッション・フォーカスト・セラピー論。どれもあくまで導入だから、これだけ並ぶと、逆にこれらを全部学べる人はいない。じゃあ、入り口から深めていくのが道理なら学派主義にならないのかな、という疑問が思い浮かぶ。

パブリック・サービスはお金に厳しい。だからエヴィデンスだけでは乗りきるのは難しい。

でも最後に信田さよ子氏が登場して、もう一度出発点に戻って、とにかく心理で開業していても協働でやってきたのだから、お金のことも考えて医療から離れるための哲学をもとと励まされて終わる。本全体は精神医療の下から離れて、いろいろなセラピーを実装し利用者のために頑張ろうと、ということ。信田氏の議論はいつも歯切れが良い。